妊産褥婦（母親）の「気になる」行動の理解と支援

－助産師に求められる安心感を届けるケア－

北九州市立大学大学院　社会システム研究科
地域コミュニティ専攻　山田 恵

要旨

今日、若年妊婦や精神疾患合併妊婦などのいわゆる特定妊婦や、周産期のメンタルヘルスに問題を抱える妊婦に対し、児童虐待予防の一環として多職種が連携し「妊娠期から切れ目のない支援」がなされている。

妊婦と接する機会の多い助産師は、妊婦健診などで支援の必要な妊婦を早期にスクリーニングし、妊婦や家族に寄り添いながら継続して支援していくことが求められている。

しかし、妊婦面接時には何の問題もなかった妊婦の 3 割が産後検診で産後うつを指摘されるなど、出産後に育児困難感を抱えている場合もあることが指摘されている（横山 2020）。

筆者も、妊娠、分娩期には特別な支援を要する妊産婦でなかったが、出産後に児との相互関係の中で「気になる」行動を示し、その褥婦の行動をどう理解して支援していくのかに苦慮した経験があった。

周産期はアタッチメントシステムが活性化する時期であり（Bowlby 1993/1996）、親の未解決の葛藤が知らぬ間に子どもに伝わる世代間伝達の好発時期でもある（渡辺 2016）。このような「気になる」行動を示す妊産褥婦（母親）も当然、アタッチメントシステムが活性化されているであろうことから、「気になる」行動の背後にある要因を助産師は丁寧にアセスメントし、適切に支援していくことが、アタッチメントシステムを沈静化させ、安心感を届けるケアを提供することにつながるのではないかと考える。

本研究の目的は、熟練助産師が捉える妊産褥婦（母親）の「気になる」行動の理解と支援を明らかにし、アタッチメントの観点から助産師の支援を考察し、「気になる」行動を示す妊産褥婦（母親）に対する支援の方向性と課題を提起することである。

第 1 章では「気になる」妊産褥婦の概観とアセスメントに活用される質問紙法について整理した。

第 2 章ではアタッチメントとその機能不全をめぐる知見について解説するとともに、アタッチメントシステムとその機能不全が生じる妊産褥婦（母親）の要因として、「非安心型のアタッチメント・スタイル」「未解決の葛藤」「自閉スペクトラム症などの発達特性」の三つをあげた後、妊産褥婦（母親）のアタッチメント対象(サポート者)とその機能不全の問題についても整理した。また、それらの要因を踏まえた妊産褥婦（母親）への支援者の課題と留意点について考察し、本研究の仮説を提示した。

第 3 章では臨床経験 10 年目以上の熟練助産師 6 名が捉えた妊産褥婦（母親）の「気になる」行動の理解と支援についてインタビューした結果から、アタッチメントの機能不全を生み出していると推測される要因を整理した。その結果、１０事例のうち特定妊婦を除く 9 事例の「気になる」妊産褥婦（母親）の背景要因の分類は、「非安心型のアタッチメント・スタイル」3 事例、「非安心型のアタッチメントスタイルと未解決の葛藤」4 事例、「自閉スペクトラム症などの発達特性」が 2 事例であった。また、半数以上の事例でサポート者の機能不全がみられていた。

第 4 章では、第 3 章で挙げた特定妊婦を除いた 9 事例のうち、分析の枠組みに対応する８事例を詳細に記述し、アタッチメントの観点から分析した。

終章では今回の研究で明らかになったことと今後の検討課題を提起した。

今回の研究の成果として、以下の 5 点が示唆された。

１．周産期はアタッチメントシステムが活性化されるが、「気になる」妊産褥婦（母親）は熟練助産師に対し拒否的な態度や不安な言動を表出したり、母乳外来に通い続ける理由を作って支援を求めるなど、様々な形でアタッチメント行動を表出していた。

２．熟練助産師は妊産褥婦（母親）の「気になる」行動を捉えた際に、その行動の意味を考え、さらにアセスメントするために、妊産褥婦（母親）に近づいて理解をするよう努めており、その行動を否定することなく、受容的態度で受け入れ、「抱える（holding）環境」を提供していた。

３．妊産褥婦（母親）のアタッチメントシステムの沈静化を図るためには、アタッチメント対象であるサポート者が適切に役割を果たしているか否かのアセスメントが重要であり、そのことが、母子のアタッチメント関係の機能不全を予防することにつながっていた。

４．アタッチメント対象の観点からみた助産師に求められる支援には 3 つの局面があり、１つは「一時的なアタッチメント対象になる」、2 つめは「アタッチメント対象へつなげる」、３つめは「アタッチメント対象を支える」ことであった。

5. 熟練助産師はこれまでの外傷体験や未解決の葛藤に対する直接的なアセスメントはしていなかったが、妊産褥婦（母親）の行動や背景から原家族との間に問題を抱えているのではないかと推測しており、妊産褥婦のアタッチメントのニードを満たすような支援がなされ、母子のアタッチメント関係の機能不全を防ぐ支援が提供されていた。

そして、今後の研究課題として、・心理療法家ではない助産師が行う「未解決の葛藤」を整理していくための心理的支援のあり方、・グレーゾーンで発達特性の有無が明確に判断しづらい事例の場合のアセスメントと支援のあり方、の 2 点をあげた。